



「仕上げの2秒」

「月曜朝会も今日で今年度は最後です。みんなで元気に朝の挨拶をしましょう。『お早うございます。』（おはようございませす。）」

6年生の合図に、たくさんの方が応えてとても気持ちのいい元気な挨拶ができました。さて、いよいよ3月も後半に入ります。月曜朝会は今日が最後。あっという間の3月。皆さんが学校に来るのは、1年生から4年生まではあと7日。5年生と6年生はあと8日。

1年生から6年生までどの学年の人たちも、今の学年の最後の月。残り数日ですね。

そしてとくに、6年生は小学校最後の数日。

これまでの1年間の努力を、6年生は小学校生活での6年間の努力を、それぞれ次の1年間、次の日々に生かしていく上で大切な時期になります。

1年生は7年間、6年生は12年間。長くても、短くても、皆さんはこれまでにできるようになったことを生かして次に進まなければなりません。

そこで、今日は、仕上げの2秒という話をします。

ずっと以前、私が焼き物づくり夢中になっていた頃のことです。益子という焼き物の産地に釉薬（うわぐすり）をさがしにいったときに、こんな話を聞きました。

焼き物を作る陶芸家で、人間国宝の浜田庄司さんという人が、記録写真の撮影に来られた写真家の方とこんな話をしたそうです。

60センチもある大きなお皿を造ります。

まず、掘り出した粘土を、汗をかきかき、何度も何度もよくこねて滑らかなよい粘土を作ります。そして、轆轤というぐるぐる回る台の上で両方の手を泥だらけにしながお皿の形にひねり出します。大きな大きなお皿です。まだ乾いていない泥のお皿はとても重いのです。これを、少し乾かしてから、このお皿を良い形にするために丁寧にかながけをし、無駄な粘土を削って良い形に整形します。

つぎに、今度は作ったお皿をひび割れさせないように、割れないように、ゆっくりゆっくりと時間をかけて乾燥させる作業。その次にいよいよ1度目の窯焼き。大きなお皿や壺や茶碗を焼くためのお窯に、削って乾かしたたくさんの作品を、割れないように丁寧に詰めます。

そしてあとは、釜に火を入れ、割れてしまわないようにゆっくり手間ひまをかけて皆さんの薪を使って丁寧に「素焼き」をします。

そして、あとはきれいに色や模様をつけてもう一度お窯に入れて焼くだけ。出来上がる寸前の段階です。

いよいよ最後の仕上げに、絵付けといって色や模様をつけるために釉薬という焼き物用の絵の具を塗るのです。とても立派な大きなお皿。いよいよこれから釉薬で絵付けをして仕上げます。これまでの粘土捏ねや、轆轤での形作り、カンナをかけての形の仕上げ、割れないように時間をかけての乾燥作業と丁寧な素焼き作業。

そして、最後の最後の仕上げの『絵付け』という、色付けの作業です。

ですからさぞかし丁寧に、慎重に・・・と、思いきや、浜田庄司さんは、柄杓に釉薬（焼き物用の絵の具）を入れ、一呼吸、ふた呼吸入れると、それこそ1、2秒で柄杓がけ（釉がけ）という方法で大きなお皿に絵の具を掛けて、『絵付け』してしまいます。

あつという間もありません。

思わず、写真家の方が「これまでこんなに手間をかけて造ってきたのですから……。もうちょっと手間をかけて丁寧に仕上げなくていいのですか……。」という、こんな答えが返ってきたそうです。

『確かにあつという間かもしれない。おおざっぱで乱暴に見えるかもしれないが、この何秒の短い作業の中に私のこれまで60年間身につけてきた経験が入っている。60年間休まず練習して、たくさんの経験をして、長い長い時間と、たくさんの努力をして、自分の力で身につけたたくさんの知識や技術、その60年分の手間ひま、たす2秒、3秒、なんだよ……。』(ただ2, 3秒で偶然できているのではないのです。長年の努力の成果がこの2, 3秒のなかにぎゅうっとつまっているのです。)

だから、出来上がった作品は誰にも真似のできない、この人にしか創れない素晴らしいものになるのです。

さあ、桃五のみなさんもこれまでの自分を振り返り、これまでの努力や体験を生かして1年生は生まれてこれまでの7年分、2年生は8年分、3年生は9年分、4年生は10年分、5年生は11年分。そして、6年生は12年分、小学校6年分のいろいろな体験や努力して身につけたこと、をどんなふうに生かすか、そして来年をどんな1年にするか、どんな自分を見つけるのか。そんな意味で残りの日々を大切にしてほしいのです。これまでの自分の身に付けた力で、自分らしく今年を仕上げてください。さて、皆さんのこれからの仕上げの数日は、どんなことを……。仕上げるのでしょうか……。

仕上げの7日。5, 6年生は仕上げの8日。あと少しですよ、大切に大切に。

